

## 思い出したこと

君を待つ間、君を待つ間の匂いがする。

何の匂いなのか、わからない。君の匂いと、街の匂いと、夜の匂いと、冬の匂いが、調べられたような、甘くて、冷たくて、白くて、優しく、清廉な匂い。君に会えるのが楽しみで、うずうずして、気を抜くと口角が手本のような弧を描いてしまう、そんな匂い。でも、何の匂いなのか、未だにわからない。

わからないけれど、でもこの匂いのもとを辿っていくと、必ずあの時の景色を通る。それを思い出すころにはもう、匂いの元のこととはどうでもよくなっていて、ぼんやりとした甘ったるい記憶にもたれかかっている。一年になる。

あの日、君は遅刻してきた。五分弱くらい。私は彼の上司でもないし、もう数回は、——正確にはこの日で三回目、——二人で出かけているような仲だったし、常習犯でもなかったし、遅刻の一回くらい何も気にしていなかった。なのにメッセージが冷たく感じたのか、あるいはまた別の都合なのか、ものすごい剣幕で謝罪の言葉を連ねる君が、もうおかしくって。それを、鮮明に覚えている。まるで、その日、私に何かとても大きい依頼でもするかのように、謝ることが目的であるかのように、謝っていて、会ってからも数分、ずっと謝っていて、私はそんな君が何を考えているのか、少しわかった気がして、うれしかったことも、凄烈に覚えている。でも、ちよつとうんざりしたような表情を見せたら、今度は謝りすぎてごめんさい、って。自己撞着も良いところ。

また思い出した、その時も、私はそう言った。「自己撞着も良いところ」って。そうしたら、君、「自己撞着」が引き出しの浅いところにあるの、教養を感じますね」と煽ててきた。満足いくまで謝ったら、今度は煽てて機嫌を窺ってきた、って思った。最初から機嫌は良いのに。子ども扱いしているのか、って今なら思うけど、なんて返そうか考えているうちに、それに言及するタイミングを失って、流れてしまった。あの時は気付かなかったけど、君、また私の機嫌を損ねたと思って、焦っていたかもしれない。だから、突然私の好きな音楽の話が始めたのか。何の脈絡も無く突然、始まったと思っていたけど、今になって気付いた。後で答え合わせをしよう。君は覚えているかな。まずは君をテストしなければ。

私はてつきり、君が『最後の恋と決めた、それを初恋と呼ぶのでしよう』  
って、すごくいいよね」と言い出すものと想定していた。もしそう言われてい  
たら正直に「そんなのは都合が良すぎる。花卉は切れても、中心は残り続ける  
のよ」って返そうとしていた。もしそう返して、君が私から離れていくなら、  
それでもいいとまで覚悟した。なのに君は「自分と花を重ねている。おそらく  
周りも数人結婚し、自覚なき焦燥に駆られている。散髪の風景を思い起こして  
いるのは、その恋すらも破れたからかもしれない。僕はそう読みました。深読  
みだと思いませんけどね。」と笑った。私はこのとき、無性に恥ずかしかつた。  
何が、かはわからない。けれど、恥ずかしかつた。恥ずかしいときと同じ感覚  
を覚えた。血が顔の表面をぐるぐると巡り、そのまま脳の深いところまで入り

込んで、熱を流し込むような、感覚。真冬だというのに、熱い。ただ、嫌な心地はしなかった。君が私の好きな音楽を、深く読んでくれていること。言葉にするには勿体無いくらい、嬉しかった。

音楽の話で盛り上がっていて気が付かなかったけれど、その間に私は君に誘導され、小綺麗な喫茶店にいた。見渡す限りの木製が目には暖かく、木目にアコースティックギターの寂しげな音が染み渡るような、優美で安らぐお店を、君は自慢気に、ここのお店がすごく良くてね、と話してくれた。得意な顔して、ずっと昔から知っているような素振りをしているけれど、どうせ、今日のために、下見に来ていたんでしょう。ありがとう。そのお店、気に入ったから、一人でも行きたいと思っていただけ、お店の名前は言わないし、場所は覚えてい

ないし、君に訊くのも癪だったから、行けてないな。この辺りはカフェも多いから、もう見つからないかもしれない。エビとアボカドのカクテルソースサラダが、美味しかった。牛肉の赤ワイン煮込みもパンにすごく合って、ぱくぱく食べちゃったな。いっぱい食べてねって言うけれど、誰のために痩せようとしているか、君はまるでわかっていない。

喫茶店での話も、そのあとの話も、もう全然覚えていない。けど、それでいい。すごく楽しかった。幸せだった。こうして君が、私を見てくれて、——目はほとんど合わなかったけど、——私のことを考えてくれて、私と一緒にいてくれて、……。ずっとこうしていたいって、思った。楽しかった。別れ際に「またね。」って言っていたことは、忘れない。

家に帰ってから、その日のことを思い返して、ああ、君も私と同じくらい楽しかったのかなあ、とか、でも私よりはるかに焦っていたのかなあ、とか、色々なことを考えて、ベッドに数えきれないほどの蹴りを入れていた。あの夜だけでスプリングが何本壊れたろう。今思うと申し訳ない。今日、帰ったら謝ろう。ちゃんと謝ろう。ごめんなさい、今日もお世話になりますよ、たぶん。

ベッド、で目が覚めるように我に返った。甘い記憶に軽く転寝してしまった。寒い、ことに気が付いた。手が水分で冷たい。水分、の違和感でまた目が覚めた。コートが綿のような白色に染められていた。散れる白色は黒く滲み、払えど払えど払われない。コートの縮れていたたウールが水分にあやされて肩に重い。傘を差そうとしたが、いつの間にか外れていたボタンのせいで中に雪が

積もってしまった。それを除けてまで差す気力は無かった。お気に入りのコートなんだけどなあ。

雪は突然、止んだ。私のところだけ。道を歩く人々はみな、傘を差して渋い表情で歩いている。私だけ、ぼつんと立っている。先まで夢の中にいた人間にぴったりすぎる表情をしていたに違いない。今も、夢のような光景にいる。でも、周りと違って明るくない。私のいるところだけ、暗い。私のいるところだけ、天気が違う。先まで何ともなく流れていた人の声も、街の音楽も、それから隔離されたように、聞こえない。私のいるところだけにだけ傘を差したような、異様な体験だった。そしてその出来事は、私のいるところだけにだけ傘を差したことで生じていた。



背中に、君がいた。黒い大きい傘を差して、何やら愉快そうな君がいた。

「真っ白だよ。そんなに待たせちゃったか。ごめんごめん。」

謝るでもなく言った君に、心も指先も暖められてしまった。まだ冷たい手で時計を見たら、思わず

「五分も遅れてる。」

と言ってしまった。君は

「ご機嫌斜めさんなのね。はいはい、ごはん奢りますよ。」

とあしらった。子ども扱いは、このところ酷くなる一方だ。子どもとして扱われたから、子どものように腕に抱きついたら、

「はいはい、公衆の場ですからね。慎みましようね。」

と宥められた。どうせ嬉しいくせにさ、と思つて君を見たら、目が合つて思はず逸らしてしまつた。目が合うくらい、普通のことなのに、なぜか、恥ずかしくなつてしまつて、なぜか、話すことが思いつかなくなつてしまつて、黙つて君の手に引かれるしかなかつた。頭に血が流れる感覚。もう、冬なのに。去年のあの時は、弾む会話で笑い合つていたのに、今はそうじゃない。ただ、言葉の無い時間も、言葉じゃない何かを通じて、君と話している心地がした。指かな。歩幅、とか。何かはわからないので、考えないことにした。考えなくていい気がした。先の匂いは、君の匂いになつていた。君の匂いが、この道の先まで、残っている気がした。この道を、知らないのに覚えていることを、思い出した。